

つくるについて考える

制作ばかりしていたある日、兒島はふと回転寿司屋に入った。
目の前を流れる皿のひとつが、ほんの一瞬、ぴたりと止まったという。
それは機械のバグとも言いきれない、妙に静かな停止で、
その瞬間、彼女は「時間が止まったように感じた」と語った。

この出来事から始まった会話のなかで、
私たちは「内的な時間」について話しはじめた。
予測されたりズムが崩れるとき、
頭の奥で何かがつかえるような、妙な感覚が残る。
そのような瞬間に立ち上がる、主観的で、曖昧で、個人的な時間のあり方。
それを手がかりにして、この展示のテーマがかたちづくられていった。

兒島、中村、對中の三人は、それぞれに異なる方法で、
この「内的な時間」への応答として制作を進めた。
出発点を共有しながらも、思考の仕方も、手の動かし方も、迷いの質も異なる。
その差異は、つくるという行為の複層性を照らし出すと同時に、
時間の感じ方や向き合い方の個別性をも浮かび上がらせている。

「うまくいかない」ときに生まれる停止、
繰り返しのなかに潜むノイズ、
死を予感するようなフラッシュバック。

制作のプロセスは、いつも予定通りに進むわけではない。
むしろ、思いがけない方向へとずれていくことで、
作品に思いがけない生の気配や、時間の層が立ち現れることがある。